

源氏物語における仏教的要素 (その一)

——横川の僧都について——

丸 山 キ ヨ 子

源氏物語に描かれた仏教に関連ある叙述の中で、本質的な意味において物語の世界に関するものを、仮に仏教的要素と名付けて拾いあげてみると、いくつかの興味ある問題が取りあげられるのであるが、中でも人物として造形され、深く物語の世界に喰い込んで、積極的な役割を果している横川の僧都について考えてみたい。

優れた仏者としての面目躍如たるもののあるこの僧都は、見方によつては、具象化された仏教として、作者の仏教観を伺うに足るものを多分に担わされていると思われるにも拘らず、従来、比較的閑却されていて、物語の終局における仏教的考察がなされる場合にも、専ら、その対者である浮舟の側からのみ照明があてられてきた傾きがある。一度僧都の側から考えてみたらどうであろう

か。このように考えて敢て取り上げてみたのである。先ずその輪郭を辿ることによつて問題点を拾つてみよう。

一

横川の僧都の造形は、手習の巻冒頭における登場の最初から、十世紀の物語の世界の人物としては、異質的なものをもっている。それは、僧都が専門家として与つてゐる仏の救いということに関する限り、徹底した信念の人として、また実行家として描かれてゐるからである。宇治の廃院に失神していた浮舟を発見し、介抱し、蘇生させて、蔭ながらその生への配慮を続けてゆく姿は、その切なる願を入れて出家させる所まで「仏の必ず救ひ給ふべき際

なり」という信念に貫かれていて、その忠実さは、仏者の慈悲として人を納得せしめるのみならず、近代的意味でも、筋の通つたヒューマニズムの具現者として、抵抗なしに読者を引きずつてゆくものがある。そうして、その造形の確かさは、同じ基盤の上に立つ深い思い遣りとして、たまたま見出された美しい若い女性浮舟に向つてのみ注がれるのではなく、その母、妹などの近親の者にも、ごく自然に、こだわりなく注がれることで獲得されている。例をあげるならば、長谷詣での帰途発病し、宇治の辺りに宿を借りて休息静養する母を案じて、「限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむ」と思えば、「山籠りの本意深く、今年は出でじ」と固く決意しているにも拘らず、急ぎ山をおりて迎えに来るというような処に見られるであろう。山籠りを決意した僧都が肉親の者の病の為に山をおりるのは修行の挫折であり、敗北である。それは未だ修行中の律僧などのそれとは異なるとしても、他律的な規則に縛られる身でないだけに、負い目を感じなければならぬ。しかし、僧都はこだわりなく山をおり、ごく自然に、母の加持に従つていのである。このようにして、一品宮の御物怪の執念さに、後の宮の切なる御文があれば、これも黙し難く山をおり、浮舟の加持を妹の尼に頼まれて降つた場合を加えれば、三度、相手の貴賤にもよらず、親疎にも拘らず、自ら掟てた山籠り

の誓いを犯して山をおり、その生命を救うことを、行なつていのである。切に求められれば、そして、そこに使命を見出するならば、まことに自在に行動している姿を見るのである。これらは、「仏の救ひ給ふべきもの」を救うことにおいて、徹底した姿を示す、掟われない心で行動する例である。

下山について上述のような掟われない自由さを見せた一面、仏の救を徹底させる為には一歩も譲らない厳しさを見せている面も、鮮やかに描き出されている。倒れている浮舟を見出した時、病者を抱えたこの場合として、不吉を理由に助け入れることを拒んだ弟子達に、諄々として人の生命の尊ぶべきことを説いた言葉には、物語の世界である事を忘れさせるものがある。

まことに人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る棄てむこといみじきことなり。池に遊ぶ魚、山に啼く鹿をだに、人にとらへられて死なむとするを見つつ、助けざらむはいと悲しかるべし。人の命ひさしかるまじきものなれど、残りの命一二日を惜しまずばあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ、人に逐はれ、人にはかりぐたれても、これ横さまの死にをすべきものにこそはあめれ、仏の必ず救ひ給ふべき際なり。なほこころみにしばし、湯を飲ませなどして、助けこころみむ。つひに死なば、いふかぎりにあらず。

同じ厳しさは、また、別の折にも發揮されている。妹尼の希望を入れ、浮舟本復の修法の為に小野に降つてゆくに当り、弟子達が、「ものの聞え」を憚り、人に聞かせじとするのを斥けて言つてい言葉である。「いであなかも大徳^{だいとく}たち、われ無慚の法師にて、忌むことの中に破る戒は多からめど、女の筋につけてまだ謗とらずあやまつことなし。齡六十にあまりて今更に人のもどき負はむは、さるべきにこそあらめ」。この激しい表現も、生ある者への仏の救を完うしようとする意志ゆゑであつた。「いとあやしきことかな。かくまでもありける人の命をやがてうち棄てましかば、さるべき契ありてこそはわれしも見つけけめ。こころみに助け果てむかし。それに止まらずば、業尽きにけりと思はむ。」と、このように思えばこそであつた。しかし、この場合、弟子達の心配は僧都一人に關することではなかつた。その意味で弟子達の心配にも筋が通つており、妥当なものがあつたのである。それは、僧都の先の言葉を受けて弟子の大徳が答えた言葉、「よからぬ人の、ものをびんなく言ひなし侍る時には、仏法の瑕となり侍ることなり。」に示されているように、一步誤れば、仏法そのものの瑕、人の躓きになる行為となりかねないからである。先達として、どんなに慎重であつても慎重すぎることをないこのような場合に、それは、個人に対する「もどき」ぐらいではすまされぬ責任を感じるの

が、この時に當つての僧都のとるべき態度であつた筈だからである。しかし、僧都はそれをも斥けて山をおりた。それは、一方では「『この修法の程にしるし見えずば』と、いみじきことどもを誓ひ給ひて」という僧都自身の切願、この場合、信仰と言いかえてもよいであろうものに、支えられていたからである。弟子達も、師の修法が成就しない場合を、懸念したのではなかつた。むしろ、すろなる女性の為にしたと云われることに、氣を使つていたのであつた。僧都にとつては、女性であれ、男性であれ、その生命を完うしうるか否かが問題であつた。そうして、加持によつて完うさせうる自信が持てた時に、何物も顧慮することは必要でなかつた。この場合仏法の躓きになるということさえ、信仰者を卑怯にする口実にすぎないと考えられたのであつた。僧都のこの信念の前に、物怪は見事に退散させられ、修法は成就したのであつた。

それが中心問題であつた浮舟に対して、僧都の示した配慮は只に体の蘇生だけではなかつた。出家者とは思えぬ細かい行届いた配慮をもつて、この一女性の魂の新生、出家に關与したのである。一品の宮の御加持に下山する僧都の立ち寄ることを聞いて、この折に出家の願を打明けようと漸く決意しつつあつた浮舟は、その志を、母の尼を通して僧都に伝えた。絶えずその安否を氣遣つて

いたその女性の、思いがけない申出でを聞き、面会して更に強固な決意を見せられて、「いとほしく」思い、山をおりた疲れもいとわず、儀式にとりかかったのであつた。髪をそぐ段になつても額髪は僧都自らがそぐという気の配りようである。儀式は終つても、数々の尊きことどもを説き聞かせて、慰め励ました。

朝廷での加持に、あらたかな効験を示して、再び小野に立ち寄つた時、案の定、往きに留守であつた妹尼の不平に耳を傾けねばならなかつたが、僧都は、浮舟に向つてはしみじみと無常を語り、出家の功德を語り、行を励むべきことを諭して、布施の絹を、法服の料にもと与えて去つていつたのであつた。その折の訓戒に挿んだ文集「陵園妾」の一句は、小野の里に行い果てようとする浮舟にとつては、まさに象徴的な意味をもつものであつた。田舎に育つて余り教養の無い浮舟ではあつたが、『思ふやうにも言ひ聞かせ給ふかな』と聞き居たり』と記されている。

その命のみすみす死を招かんばかりに投出されている所から救い出し、蘇生させ、妹尼のかしずき育てる心に協力して、山を降つてまでも修法をし、絶えずその安否を氣遣つている僧都のこのヒューマンな心情、そして、その遂行の為には自らの誓を破つても敢然として行おうという自在な心境、そして又、そうした態度を人に誇られると、筋の通つた考をもつて、なすべき事ならば反

論もし教戒もする、こうした人物が物語の以前の何処に描かれていたであろうか。恐らく作者は、仏者としての慈悲、生きとし生けるものにそがれる仏の慈悲の遂行として描いているのであると思うが、その思想に、行動に、まことに典型的な姿を示しているのである。僧都という僧侶としても学徳すぐれてあるべき階層に属する仏者として、理想化が行われているからであろうとも考えられるが、それは内実を伴つた高僧としての造形を、しかと捉えられている姿である。しかし高僧といつても、階級的にはより高位にある「山の座主」を向うにまわして、その退散させえなかつた一品宮の物怪を、見事に退散させていることにおいて、位置だけにものを言わせているのでもない。實在の僧都にそういうモデル的人物があつた故に、本当にあつた事として描かれる物語に、本当らしくとり入れられているのかもしれない。それはともかくこの筋の通つた、仏者として徹底した人物造形は、やはり作者の意図したものでなくてはならない。これは専門家仏者に与えた作者の評価の現れでなくて何であろう。横川の僧都の造形こそは、古代から中世を通じて、仏教説話に出てくる、道に徹した仏者の、典型的な姿として認めることの出来る造形をなしていると思われるのである。そのように内面的な意味で質的に優れた核を持つたこの僧都は、同時に、物語中の人物としても今迄見て来

た所でも分るように、過不足なき肉付をなされているのである。

決して勸善懲惡・因果応報の傀儡として、説話の中に出て来るような荒削りの人物としては、終つていないのである。どこまでも物語に描かれた人物として、具象化されているのである。

このように理想的な存在——それは作者の時代の仏者としてのみでなく、何時の世でも、仏者以外の世界においても通用するすぐれた人として、読者を納得させるような造形であつたのであるが、この僧都を動転させることが起つてきた。彼が、加持の合い間に、宮中での夜語りとして、中宮の耳に入れたあの不思議な女性の話が、思わぬ方向に展開したのであつた。みよりのない女性の素性が露わにされたのである。僧都に助けられた女性が、薫大將の思ひ人浮舟であることが槌められ、薫に知らされ、その薫の訪問によつて、僧都も始めて事実を知つたのである。その時の僧都の驚き。何物も犯すことの出来なかつた僧都の平安をこれ程かきみだし、狼狽させたものはなかつた。上に辿つてきたように僧都をみたものは、これをどのように解したらよいのであろうか。ここに第一の問題をみるのである。

薫の訪問によつて、出家させた女性がその「知るべき人」であつた事を打ち明けられた時、「……胸つぶれて、いらへきこえむやう思ひまわさる」と描かれ、そして、出家させた事を「この世

にはなき人と同じやうにしなしたることを、あやまちしたる心地して罪深ければ」と反省させられてさえている。しかし、この「あやまちしたる心地」を分析してみると、一見、先に見て来たような毅然たる態度に矛盾するように思われるが、事實はそうではなく、あの場合、この場合に応じた、しかし一貫した僧都の考え方、態度を理解しようと思ふのである。それは、決して、薫のような高貴な人に云われたから、また、そのような頭官の思ひ人だからというような事ではなかつた。「いとほしう罪得ぬべきわざにもあるかな」と思い「あぢきなく心乱れた」その底には、生い先遠い人の姿をやつして、どのような可能性——果報を秘めているかも知れぬのにという、出家させる時にも一度念を押さずにはいられなかつた懸念が、今現実となつて現れて来たからであつた。それは薫のような高貴な、しかも、そこから逃れる理由を考えることの出来ぬような人柄の男性に被護されていた女性であつた事を知つたからである。そのような意味での、薫のような人の愛人を、氣早に出家させてしまつた軽率さを悔いたのであつた。還俗を願わしいものとしてもそれが当然であるような薫——そういう人を相手としている、今出家しなければならないということとはなさそうな女性を、何かわけありそうではあつたが、性急に出家させて、そこから当然引出されるであらう、後悔、還俗というよう

な事態を憂慮しなければならないこと、そのあやまちに思い至つたからであつた。浮舟の住む庵への道案内を頼まれて、「なにがしこのしるべにて必ず罪得侍りなむ」と云わずにはおれなかつたのも、同じ理由である。僧都はこうした狼狽の色を正直に現して、自分の上述のような意味での軽率さは認めたけれど、薫のたつての頼みにも拘らず、自身山をおりる事はしなかつた。この場合は、そこで踏み止つてゐるのである。妹の尼と浮舟とに、事情を明かした手紙を書いた。そして浮舟宛のは、薫の連れて来た浮舟の異父弟、小君に託して持たせてやつたのである。僧都は、この場合も、薫に頼み込まれれば、その意のままに動く人では勿論なかつたのである。

今日の私達には、薫の訪れを迎えたこの時に、出家させた浮舟の健気な決意を伝え、薫にも出家を促すことをなしたなら、もつと立派であつたように思われる。しかし、そういう奨めは「この世にてはなき人と同じやうにしな」さねばならぬ、当時の、正統的な出家観——物語の中でもよき人はすべてこういう考えをもつてゐる——からは容易に出来るものではない。自ら希望しても、生い先ある人の出家は、専門家僧侶として立つ道を選ぶ以外は、先ず押えるのが常識であつたのである。母の尼宮その他、系類へ

の責任、朝廷での重い責任にすべて関つてくる問題であるからである。

第一の問題を上述のように解して先に進むならば、次に問題になるのは僧都の浮舟に宛てた手紙の内容である。この手紙の解釈こそ、かかつて、この僧都を解し、この物語における僧都の位置を決定するものと云えるであらう。この手紙は浮舟に関するものゆえに、従来から研究者にも取りあげられて来たものであるので、それらの説をも検討して進む都合上、項を改めて考えてみたい。

二

今朝ここに大将殿のものし給ひて、御ありさまたづね問ひ給ふに、はじめよりありしやうくはしく聞え侍りぬ。御ころざし深かりける御中を背き給ひて、あやしき山がつの中に出家し給へること、かへりては仏の責め添ふべきことなるをなむ、うけたまはりおどろき侍る。いかがはせむ。もとの御契あやまちは、はかりなきものなれば、なほ頼ませ給へとなむ。ことごとには、みづからさぶらひて申し侍らむ。かつがつこの小君聞え給ひてむ。

これがその全文である。私が問題にしたい所は、「御ころぎし深かりける御中を」以下百二十字ばかりであるが、その中で「もとの御契あやまち給はで、愛執の罪をはるかきこえ給ひて」という箇所については、解釈の上で諸説があるので、それを瞥見してから卑見を述べたいと思う。僧都の手紙の中にある「もとの御契あやまち給はで」には、これを浮舟の還俗への奨めと見るか否か、なお還俗を奨めると解する場合も、それは出家させた僧都の態度と矛盾すると見るのと、矛盾と考えるような低級視すべきでないものをもっているという見方とに分れる。

浮舟を出家させた僧都が、還俗を慫慂するなどということがありえようかという考えから、否定説をとられるのが、『宇治十帖の結末 追記』（源氏物語の思想 多屋頼俊著 所収）の説である。氏は宇治十帖の結末は、源氏物語の結末として完全に終わっているものであつて、決して中絶の形で筆が止められたものではないということ論証された追記として、氏の諒解では「この言葉は長い間誤解せられて居り、現代に於いてもその誤解が継承せられていて、それが夢浮橋中絶説に一つの根拠を与えて居るように思われる」とせられ、その解釈を示しておられるのである。中絶説はこの場合関係がないので直ちに氏の解釈に入る。氏は「浮舟は大将との関係の復活など夢にも願っていない。大将も浮舟お破戒

させようなどとわ少しも考えていない。そして僧都わ、万一にも破戒とゆうような事になつてわ大変だと思つて、十分に考慮お廻らし、その危険がない事お確めた上で、紹介状お書かれたのである。その最初の紹介状に……男の愛着が深いようだから、もとのように夫婦になつて……戒お破つてもかまいませんよ……などと書くことわ到底ありうべからざる事である。横川の僧都が若しもこんな手紙お書いたとするならば、この物語は支離滅裂なものである筈である。」とされ、先ず本文を検討されて意味の異つてくる異文のないこと、また注釈を調べられて還俗説は岷江入楚の三光院実枝の説から始つている事を注意される。そうして三光院以下湖月抄などの系列が、「愛執を晴らせ」とする誤を犯しているが、本文の「愛執の罪をはるかき聞え給いて」の「愛執」は「罪」にかかる修飾語であるから「はるかき」という動詞の目的語は「罪」であり、従つてこの文の意味は「（愛執の）罪をはるかき……」で「愛執（の罪）をはるかき」ではなく、「もとの御契りあやまち給はで」とは、三光院以下の注釈者が云つていふように、「もとの如くの契になり」ではなく、「もと夫婦であつたその因縁お捨てないで、その因縁に従つてとゆう程の意味である」と解いておられるのである。多屋氏の御説の趣旨はよく分るけれども、「もと夫婦であつた因縁を捨てないで（愛執の）罪をはるかき」とは、

具体的にはどうせよというのであろうか。それについては説明が与えられていない。どうも解釈に無理があるようである。氏の云われるように「一日一夜出家得道 二百万劫不墮惡趣」という尊い出家である。これを誘惑して廃棄せしめるならば、廃棄した当人も、廃棄させた人も、手引をした人も無量の罪に該当するであろうことも分る。しかしそういうことを考えた上、還俗説をとるとしても、氏のいわれるように、学徳兼備の僧都に、「(一日の出家の功德は無量である。あなたわ出家してもう九ヶ月になっている。無量の功德わ、その又何百倍にもなっている筈だから、この辺で破戒しても、未来わ大丈夫です)」というような「低級愚劣な算盤勘定」をさせる筈がない、と云われるその解釈は、すこし大げさすぎるように思うが、どうであらうか。それも云い方、考え方ではないであらうか。現実の事態に応じて杓子定規でいかな場合もある。私自身の考えは後に述べるが、たとえ還俗を考えしていたとしても、こういう露骨な考え方でない事は、その所を少し注意して読めば、分る筈と思われるのである。

次に還俗を奨めていると解して、そうすると僧都の行動に矛盾があると云われるのは「源氏物語における宗教的内面化」(「文化」昭和廿五年七月、小野村洋子氏)である。氏は浮舟の生存を知つて愛欲に引かれる薫の請によつて、浮舟を出家させた横川の僧

都が、浮舟に還俗をすすめるのは矛盾しているといわれるのである。氏はなお、僧都のすすめにあつて、浮舟はなすべき方途もないが、それでも悲劇的世界の宗教的転向を予感せしめ、又僧都の高い愛は、物語の基底の世界觀的なものの現れであつて、そこに悲劇性への融和がある、と、しておられるが、愛執は罪であり、僧都の立場からは否定さるべきものであるにもかかわらず、これを否定せよとでなく、浮舟に薫の許に帰る事をすすめる、と、とられている。そしてそれは僧都さえ解決出来ない難問題としてしているのである。僧都の還俗のすすめは、そのように解釈しうるものであろうか。出家させたものに対して、還俗のすすめは、勿論中に問題を含んでいるのではあるが、矛盾しているというように簡単に対立しているものとは解せないのである。

以上の見方に対して、やはり還俗説には立つが、僧都の浮舟に対する還俗の勧奨は、薫及び浮舟への罪の滅除を考えているのであつて、低級視すべきではないというのが「源氏物語の思惟」(国語国文 昭和廿八年六月、洲江文也氏)の解釈である。氏は、僧都の浮舟に対する還俗のすすめは、源氏物語時代における男尊女卑、それも身分ある男子薫に対しての浮舟の卑しき女性としての犠牲とも考えられるが、それは余りにひどい。むしろ、仏教における女性觀、若菜下の巻、「いひもてゆけば女の身は皆同じ罪深きも

とるぞかし」すなわち、涅槃經^{註1}の「所有三千界、男子諸煩惱、合集為一人、女人為業障、女人地獄使、能斷仏種子、外面似菩薩、内心如夜叉」を踏まえたこの考え方と、同時に源氏が女三宮を論じて（同じく若菜下の巻）「この世はいと易し、事にもあらず、後の世の御道（朱雀の極樂往生）の妨げならむも罪いと怖ろしからむ」とある言葉を考えると、仏教の男子優先思想と共に、女人の罪因觀思想がよく分る。そこで、問題の箇所も、薫君が浮舟に愛着心を残していることは「薫の後世の御道の妨げ」を浮舟がしているわけで、浮舟の後世のいと「怖ろしからむ」罪となるから、「添い直すことによつて、その罪を滅除出来なさつて下さい」と、僧都が申しているのだと解する事が出来る、と云つておられる。

私も、やはり還俗を勧奨しているとみて、僧都の、仏者としての徹底ぶりを思いこそすれ決して矛盾と考えないものであるが、それは次のように考えたいと思うからである。浏江氏とは別の出發をなして、改めて氏の説にふれたわけであるが、それを拝見した後でも、その鍵である仏教の女人罪因觀説はとりたくないと思つている。物語も若菜下巻における、執拗な六条御息所の死靈などに対しては、幾分そういった観点からの發想がなされていると思われるが、作者自ら何時でも、何から何までそうした考えで動かししていたとは思われない。それよりは僧都の手紙の言葉に即し

て見てゆくことで解釈出来るのではないかと思う。第一には、薫という一通りならぬ関りのある人を逃れて、独り背いて独断の出家をしたということ、それは「かへりて仏の責め添ふべきことなるをなむ」と云われていることであり、それだからこそ第二、「もとの契あやまち給はで愛執の罪はるかし給へ」ということになつていると思うのである。薫を囲む当時の貴族社会において、後見者保護者として存在する夫を背いて、独断で出家する事が賞讃すべき行為でない事は、光源氏の悲しみの故に、何度も切実に願ひ訴えながら、その許しを得ないままに出家を思い止つた紫上の態度を省るべきであろう。（若菜上、下、御法の巻）紫上を描いた時代には、作者の中で、ものあはれの想念が勝を制していた故に出家が思い止まれ、浮舟を描いた時代には、仏教的な思想が優位になつた故に、浮舟をして出家せしめた、という考え方には、私は賛成しかねるものである。もののあはれの心情は、最後まで肯定せられているのであつて、人々の心情の評価の基準は、始めも終りもそんなに変化はしていないと思う。出家は貴い事である。浮舟の出家の願も真摯であつた。「とまれかくまれ思し立ちてのたまふを、三宝のいとかしくほめ給ふことなり。法師にて聞え返すべきことならず」。だから僧都はその願を容れて、下山の疲れもいとわずに、得度、受戒の式をとり行つてやつたのであ

つた。しかし、独りとのみ思っていた浮舟が、薫に関わる存在である事を知った今、話は別になつてくる。二世の契を交わした人があるならば、その人との関りにおいての時機というものがある。

浮舟の出家は、浮舟の側に立つてみればそれ相応の必然性をもつて描かれてはいる。しかし、当時の男女関係において、あれ程よき保護者であつた薫に対しては、余りにとつ突であつた。失踪入水、出家という道筋は、深刻なようで浅く、全体的には育ちの賤しさから来る無思慮、軽薄な行動として評されているのではないであらうかと思われるのである。「兎めきおほどこに、たをたを」と見ゆれど、けだかう世のありさまも知るかたすくなくて、おふし立てたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。」自殺を決意した時このように云われている。出家のことにしても、同じような限界状況に追いつめられて出家した高貴な婦人達、藤壺の出家は桐壺帝の崩御後の事であるし、女三宮は、源氏の愛の冷え切つてしまつたのに耐えられず、出産後の衰弱も加つて死を目前に控えたような危急な場合であり、源氏も一応は納得の上の事であつた。もちろん、たとえ夫があつたとしても、その人柄、生活態度が問題である。相手が、まめ人の薫大将である故に、話は特別になつてくるのである。奔放放埒な夫の不誠実さに耐えかねてという事ならば、夫の合意は必要ではな

いであらう。けれども薫程の人の愛人である者に、その独断が許されるであらうか。この場合、僧都はそれ以上二人の間に立ち入つた考慮をなす事は控えるべきであらう。読者が知つていような複雑な事情が、浮舟の前半生に伏在しているということを僧都が察しないからといつて、僧都程の人の洞察をもの足りなく思うべきであらうか。浮舟の前半生の秘密が具体的に分らなかつたとしても、とにかく、わけありげな女性の出家の願の切なるをあれんで出家させた。しかし、それが、思いがけない、篤実な青年貴族の、今もお誠実にその安否を氣遣つている対象であつた事を知つたのである。それは、どういう事情が伏在するとしても、浮舟の身勝手として、その軽率さを問われても仕方がないであらう。浮舟だけの問題ならば出家はそれとして認められるであらう。しかし相手のあることだつた。しかもその相手は、誠実な態度で対面を欲しているのである。僧都はそこに、浮舟に対する薫の、愛執の発露を察知したのである。もつとも、薫もこの場合、浮舟の出家を聞いても、一応認めた如き口吻をもつて僧都に語っている。「罪輕めてものすなればいとよしと心安くなむみづからは思ひ給へなりぬるを……」。また小君に託した手紙にも「さまさまに罪重き御心を、僧都に思ひゆるし聞えて」と、出家をも含んで僧都に導かれている現在の姿を肯定しているようである。それにも

拘らず、僧都に案内を頼んでいる。篤実な青年薫の、それ故に断ち難い思いを察した僧都は、果断な決意をしたのであった。薫の来訪を受けてすぐ心をかすめた不安、「容貌かたちをかへ、世を背きにきと覚えたれど、髪鬚を剃りたる法師だにあやしき心は失せぬもなり。まして女の御身は如何あらむ。いとほしう罪得ぬべきわざにもあるべきかな。」という思いは超克された。知らぬ前半生のことはともあれ、浮舟の出家の願は真摯なものであった。この場合、仏の教に真に徹するならば、出家させる時期を誤つて早く決行した自分の軽率さも、浮舟の軽率さも、潔く認めて、浮舟をもとの契を完うすべく還俗させ、薫の愛執に関つてその往生を妨げるような立場から解放しなければならぬと思つたのである。時期尚早の故に還俗をすすめなければならぬとは云え、今は、真摯なものであつたその出家の功德に頼んで、出家の功德は功德として一分の行註2として認めながら、薫の許に帰つて時を待つべきである。もとの契りを振りすて、独り出家の姿だけを保つていても、自分だけが救われればよいと思うものは、自分だけでも救われるものではないのである、と。還俗は、それを奨めた者も、なしたものも、無量の罪重き行いである。しかし、それを敢てしても、もう一人の責任を負うべき相手の往生の妨げになる罪よりは、それを充して共に救われたならば、それこそ真の救というものである。

る。もし時を貸して、時を失つたとしても、それが救われない原因になる筈はない。仏は必ず時を与えるであろう。僧都の指示した道は愛執に処して愛執を超える道であつた。一日の出家の功德ある浮舟は、出家前の浮舟とは異なるはずだからである。

独断の出家に対して、それが軽卒と認められようことは、本人である浮舟の反省においても自覺されている。小君の持参した薫の手紙をみせられて返事のしようもなく、当惑した心に辿る思を次のように描かれている。「かくつぶつぶと書き給へるさまのまぎらはさむかたなきに、さりとて、その人にもあらぬさまを、おもひのほかに見つけられきこえたらむ程のはしたなき」と。浮舟が薫と対面しなければならなくなつた時、「はしたなく感じなければならなかつたのは、まず、「その人にもあらぬさま」であつた。なぜはしたないのであろう。それは自分で自分の生涯を先取して否定した、おほけない心、被保護者でありながら、よき保護者であつた薫に対して、潜越な態度であり、ただ背いて逃れ出たなどということよりも複雑な思いをもつてその前に出なければならぬ責を感じたからではなかつたであらうか。浮舟のこのような氣持を付度する事によつても、浮舟の薫に関つてある関りやうが、現実的な浮舟の立場であり、そこから「かへりては仏の責め添ふべきことなるをなむ、愛執の罪をはるかし聞え給ひて……」

という僧都のすめが導かれてくるのであらうと思うのである。

このように見てくると、薫の訪問を受けて狼狽した僧都の姿も浮舟に還俗をすすめる僧都の手紙の趣旨も、一貫して解釈出来はしないであらうか。仏教的真理、仏の救の教に徹する事においては常識を遙かに超えた深さを持ち、そしてまた、個々の場合に応じて、自在に判断し行動することの出来る「信」故の自由を持つた最もすぐれた姿として、横川の僧都を考える事が出来ると思うからである。それだけに、世俗にうとく、時に誤てば、正直に、おろおろと狼狽する面もあつた。けれども、その時にもなお、それにこだわらず、それを超えて、災を転じて更に深く仏の救の業の徹底へと導く事をなした人なのである。

三

僧都の造形とその問題点については以上のように考えられると思うが、もう一度翻つて、浮舟の側から、その出家への道程と、心理の展開とを辿り、僧都との関りの面を瞥見しておこう。

薫にかくまわれて宇治に据えられた浮舟が、ふとした事のはずみでその居所を匂宮につきとめられ、欺かれて会つてしまった所までは、まだ浮舟の責任は軽かつたといえよう。それは「さぶらう人の中にも、はかなうものをものたまひ触れむと思し立ちぬるか

ざりは、あるまじき里までたづねさせ給ふ、御さまよからぬ御本性なる」宮の、巧妙な手段に、意表をつかれてしまったからである。しかし、欺かれて会つて後、素朴な浮舟を、大きく揺さぶるような、匂宮のひたぶるな言動に心惹かれ、その方に傾斜して行つた時、浮舟自身でさえも、折に立ちどまつて反問しなければならなかつたように、浮舟自身の責任の問題になつて来ていた。物語の作者は、薫と匂との上に思いを馳せてゆらぐ心の、ともすれば匂宮に深く傾斜してゆくのを、戦きつつ見つめている浮舟の姿を、一つのリズムをもつて繰返し描きつつ最後の破局にまでもりあげている。橘の小島での逢う瀬は、はじめから浮舟の拒みうるものであつた。しかし、浮舟はむしろその快樂に身を委せたのであつた。浮舟の責任はこの辺りから、より明確な形でその心に思い起されてくる。匂宮との関係が薫に握られ、そのことがほめかされて、宇治の邸の警固が厳しくなつた時、過ちを惹き起したならば許しえないという母の言葉をきき、また二人の若者に心を分けて二人を破滅に陥入れたという右近の姉の話を聞いて、浮舟は今更のように自分の罪の深さに戦いた。そうして自殺の決意がなされたのであつた。しかし入水を思つて踏み出したその時さえも、後で思い出された所でみると、宮と覚しき男に誘なわれるままに、宇治の邸を後にしたのであつた。匂宮へ傾斜が、浮舟

の運命のすべてを決定したのであつた。「思ひもてゆけば、宮をすこしもあはれと思ひきこえけむ心ぞいとけしからぬ」と自ら反省している。入水は遂げられなかつた。救われて小野にかくれ住むようになつて、再び中將の求愛の対象になりかねない状態になつて来た時、もう一度前轍を踏まなければならないような危機が、彼女を必死の出家の願に追いやつたのである。「いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけり、と、見知りにし折々もやうやう思ひ出づるままに、『なほかかる筋のこと。人にも思ひ放たすべきさまに、とくなし給ひてよ』とて経習ひて誦み給ふ。心のうちにも念じ給へり。」このような経路を経て確固たる決意に達した切願の故に、僧都は動かされたのであつた。浮舟の自らの内に凝視せしめられた罪、それを清算しそこから救われる道は出家以外になかつた。しかし、同時に、中將に求愛されかねない今の身の上、尼君達さえそれを願っているかに見える身辺の雰囲気、浮舟にとつては、救よりも逃避の念の方が強かつたかもしれない。それでも男女問題に深い痛手を負つた若い女性を、出家に追いやつた状況設定は一応整っているのである。

密通關係に陥入つた女性は、藤壺も、女三宮も出家している。作者はそれを許されざる不義として考えていたのであろうか。桐壺の帝に知られなかつた藤壺は別として、女三宮の秘密を知つた

源氏は、その産褥の中から出家を願うのを「まことにさも思しやりて宣はば、さやうにて見奉らむは、あはれなりなむかし」と思つている。薫もまた浮舟の出家を「罪輕めてものすなれば、いとよしと心安くなむ、みづからは思ひ給へなりぬるを」と云つている。源氏の場合と薫の場合とは、全く異なるものがあると考えられるけれども、作者の中に暗々裡にこうした人々こそ出家に導かねばいられないものがあつたのであろう。その本質的な意味で、主体的に、出家を願つた紫上が、その切願にも拘らず、生前それを遂げる事が出来なかつたことと併せ考えるならば、作者の出家に対する考え方に多くの探るべき問題が残つていることを思うのである。

藤壺も、女三宮も、浮舟も、出家を願うことにおいて一筋のものがあつた事は否定出来ない。だからこそ、それぞれの場合周囲も導師も動かされて、決行されたのである。そうしてその願の切なる事は、既に一度踏み誤られた道を繰り返したくないという意味で、前非に対する自覚は充分にあつたわけである。その体験からかいまみた各々の運命のつたなき、欠如、そこに無常を觀、離脱を考え、必死の希求があつたのである。浮舟の側から見ると、今日只今の出家はやむにやまれぬ切願であつた。僧都はそれを認めたればこそ、願を入れて叶えてやつたのである。浮舟の出

家は、「この世ではなき人と同じやう」になる出家としては、主観的にも、客観的にも確固たるものであつた。それを看取していればこそ、僧都も「一日の出家の功德は、はかりもなきものなれば、なほ頼ませ給へ」と敢て云い得たのである。

併し事情が明らかとなつて、その出家が結果的には一方的なものとして、出直しを余儀なくされた時、僧都の手紙に奨められたような、自由な心は浮舟に獲得されていなかった。薫の手紙を拵げたまま、その前に「顔も引き入れて臥し給」はなければならぬような姿が、浮舟にとつて最後の姿であつたのである。作者はそこに何を語ろうとしていたのであろうか。

僧都の造形を、上述のように見て来るならば、そうして還俗の奨めにも、愛執に引き廻されたのではなしに、愛執を超越せしめるべき飛躍の為の犠牲として、敢て自らもその渦中に飛込むほどの積極性をみせたものとして、うけとるならば、それに答えられなかつた浮舟は、僧都の指示した所には、程遠い所に居るものとししか考えられない。それは恐らく、物語に出てくる在家の出家者のすべてに求めえぬ境地であらうと思われる。専門家仏者としての僧都の造形に、あれほど徹底したものを見得たにも拘らず、在家の出家者にそれに応じるものが見られない事は、そこに作者の仏教観の問題の伏在するのを見る。そのことは稿を改めて述べる

つもりであるが、一言言い添えておけば、それが「この世にてはなき人と同じやう」にする出家であつたからではないかと思うのである。

註1 「河海抄」以来「岩波古典文学大系源氏物語」註に至るまで、若菜下の巻「女の身は皆同じ罪深きもとるぞかし」の出所として涅槃經といふこの文句を掲げているが、「源氏物語事典」では涅槃經とのみあつて本文はそののみ示されてはいない。涅槃經にはない。筆者は国訳大蔵經に當つてみたのであるが見出せないまま、大森志郎教授の教示で、織田得能編「仏教大辞典」外面似菩薩の項を引き、この句が出典未詳の本邦古徳の偈語と註せられているのを知るところを得た。ここに記して感謝させていたたく。

註2 一分の行優婆塞という。天台宗祖竜樹の戒律観にすでに見られる。最澄もまたそれを唱えていたという。

(本学助教授)